

## カンボジア世界文化遺産プレアビヒア寺院遺跡概要と周辺地域保全開発の方針

特定非営利活動法人 アジアの誇り・プレアビヒア日本協会

### 1. 寺院遺跡の概要と価値

プレアビヒア寺院はタイとカンボジアの国境線に沿うダンレック山脈（延長約 320 km、最高標高 753m）の中ほどの山頂断崖テラス（標高 625m）に位置する（東経 14° 23' 18"、北緯 104° 41' 02"）。ユネスコ世界遺産に登録された寺院区域（11ha）は 1962 年に国際司法裁判所の裁定によりカンボジア領として認められた。この事実と当時のタイ政府の了解に基づいて、ユネスコはカンボジア政府の要請により世界遺産への登録を 2008 年 7 月に認めた（図 1）。



図 1 寺院参道第五山門

この寺院遺跡の特色の一つは参道・山門・祠堂に至る軸が南北方向一直線上にあることで（図 2）、北側のタイからは比較的緩やかな勾配でのアクセスが可能で、2009 年 4 月に国境をめぐる武力衝突が始まるまでは年間約 7 万人の観光客のほとんどはタイ側からアクセスしていた。一方、寺院の南方向、標高差約 500m 余の眼下に広がるカンボジア領の森林原からのアクセスは、9 世紀末に寺院が建設された当初から、南のカンボジア側（アンコール寺院方向）



図 2 寺院南西方向から鳥瞰（ユネスコ提供）

から、2,500 有余段の石段参道によってアクセスが可能で、通称、巡礼石段参道と呼ばれて、巡礼者の通う道であった。この石段は一般観光客にとっては通行が危険であるので、2010 年、この石段参道に沿って木造の階段（2,780 段で登坂に 2 時間を要す）が整備された。また、近年になって、急峻な登坂道が完成し、トラックでのアクセスも可能となった。

寺院の本堂が位置する山頂断崖テラスから南方向カンボジア平原を見下ろすと、今やアジアモンスーン地帯でも希少となってきたモザイク状森林が広がっている（図 3）。山頂絶壁上の中空に突き出た大岩の窪みは、昔から山岳信仰隠遁行者（修験者達）が瞑想や苦行を行う聖地であった。ここにヒンズー教の寺院建立が始まったのは 9 世紀末のヤショーバルマン一世で



図 3 寺院南に広がるモザイク森林原(2018 年)

あった。その後、歴代の王が建設を引き継いで、11世紀前半にはスールヴァルマン一世によって大幅に改造され、13世紀アンコール王朝の衰退まで歴代王朝がヒンズー教に加えて仏教をも祭る寺院として大切にしてきたと言われる。仏教がインドシナ全体に普及してからは仏教徒達の参拝する寺院として存在していた。この寺院はアンコール寺院から遠く離れた（直線距離で150km）辺境に位置するが、その果たした文化的、宗教的、政治的役割は極めて大きいと言われ、アンコール王朝時代に建立された多数の寺院の中でも特異な役割を果たしたことが次第に分かってきた。これが1992年アンコール遺跡世界遺産登録に続いて、2008年にカンボジアで2番目に世界文化遺産委に登録された主な理由である。

寺院としての建築規模はアンコール遺跡群に到底及ばないが、ユネスコ遺産登録基準10項目の第1項「人類の創造的才能を表現する傑作」が適用された、当協会理事が東京大学サステナビリティ教育プログラム教員と共同して作成した“Orientation Plan for the Development of the Preah Vihear Area (final draft)”報告書では、この登録基準に加えて第2基準「ある期間を通じてまたはある文化圏において建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの」、および、第4項「人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例」も十分適用されると指摘している。

インドの著名なアンコール遺跡専門家のサハイ教授（ユネスコおよびAPSARA<sup>1</sup>顧問）の著作「Preah Vihear: an introduction to the world heritage monument by Sahai, Cambodian National Commission for UNESCO, 2009」によれば、この寺院遺跡と周囲の景観（地形）はシバ神が指揮する“天空の劇場”であったと述べている。寺院の位置する山頂はシバ神（Lord of Peak: Shikharesvara）が座す聖地で、東方向50キロに位置するもう一つの山頂にはブラフマン神、西方向20キロの山頂にはヴィシュヌ神が坐すとされ、これらのヒンズー教の3大神が天空の劇場で舞うとみなしている。さらにサハイ教授は「巡礼者はカンボジア森林原から標高差525メートルを登って山頂寺院に至る2500有余段の石段参道を人生の苦難の道に譬え、山頂寺院に至り、石壁や切妻（破風）に掘られた神話のレリーフに共感し、本堂に祀られたシバ神を象徴するリングを礼拝し、いよいよ断崖絶壁突端の大岩聖地（日本の山岳信仰でいう御嶽（ミタキ））にたどり着く、そこから眺める眺望の中に3大神が天空に舞う姿を思い浮かべて、人生の究極の境地である喜びを感得したに違いない」と述べている。

この寺院と周辺自然景観には宗教神話世界とガイアの融合、あるいは天地人調和（現代用語でいうシンビオシス（Symbiosis）を示す古来クメール人の精神世界の豊かさを物語っていると見えよう。彼らはこの地を寺院建築（文明）とその周囲の自然生態系景観が共鳴共生する至高な聖地として受け止めていたのである。この文化遺産は訪れる者をして天地人の融合共生を課題とするエコフィロソフィーのイメージを喚起させる潜在力があると言える。

---

<sup>1</sup> APSARA : Authority for the Protection of the Site and the Management of Ankor Region, アンコール遺跡群の保全と監理を行うカンボジア政府機構

文化遺産としての価値と、これに共鳴する自然生態系の価値との融合が、訪れる者の精神世界に強くインパクトを与える世界遺産と言えよう。ほとんど手つかずのモザイク状森林原の天空に浮かぶプレアビヒア寺院遺跡の普遍的価値は、寺院周辺の広大な生態系森林景観の回復と保全が不可欠で、ユネスコは2008年の登録時に周囲景観の回復保全を強くカンボジア政府に勧告した。

## 2. 周辺地域の修復・保全・開発の方向性

政府はユネスコの勧告を真摯に捉え、またアンコール遺跡群の土地利用規制による景観保全の困難さの経験を糧として、寺院周辺地域保全開発のために並々ならぬ努力を傾注し、迅速な対応を始めた。土地利用規制に関しては、2010年7月には寺院を中心とした420km<sup>2</sup>を

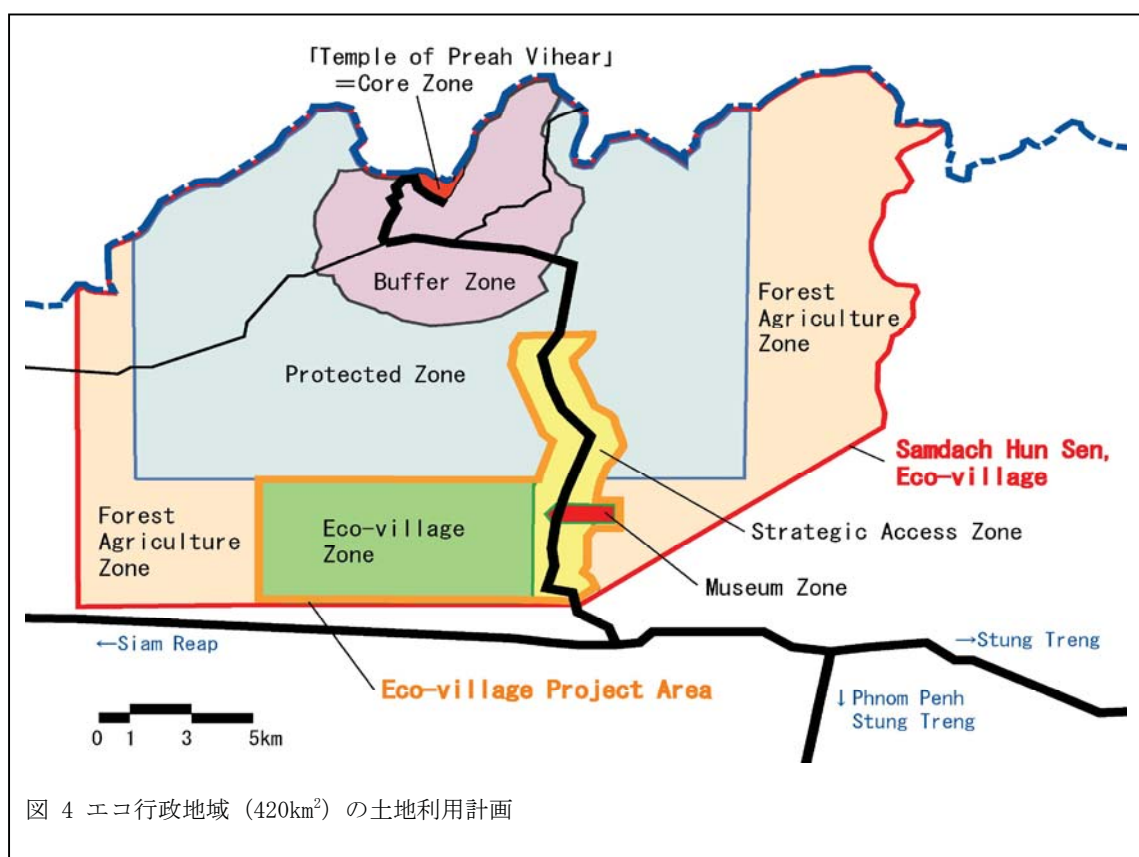
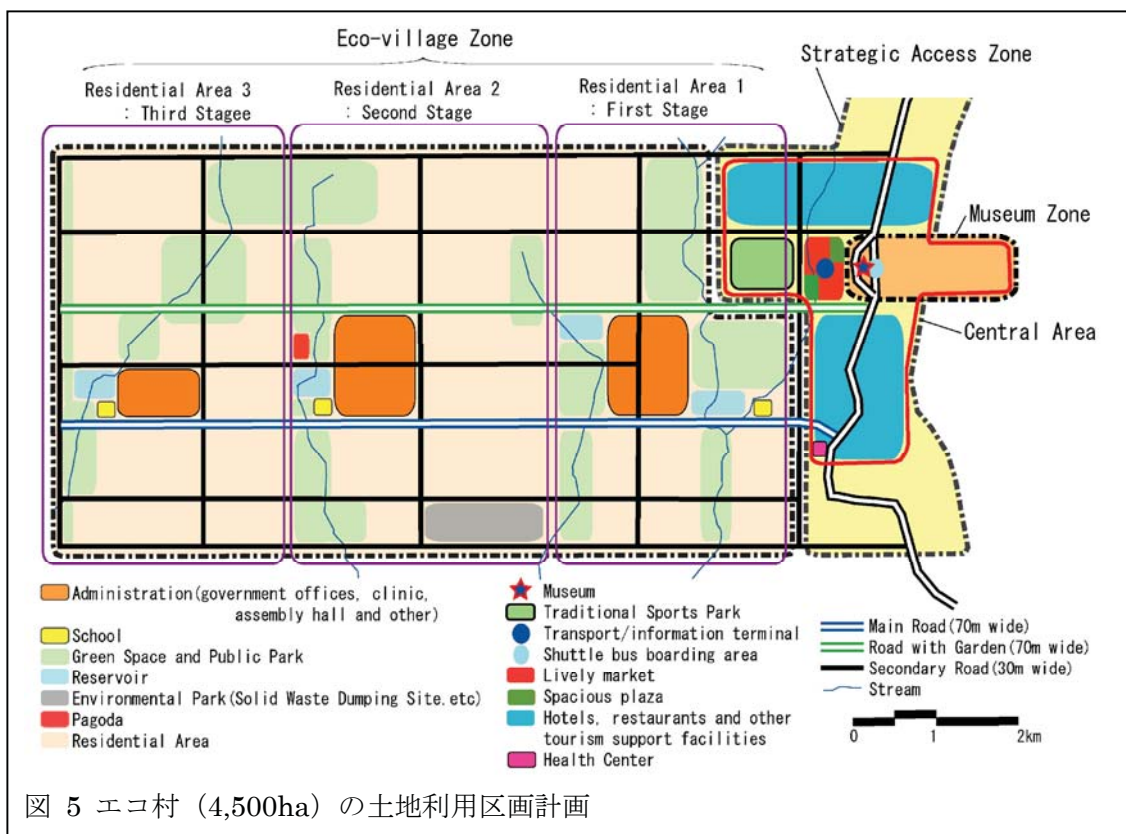


図4 エコ行政地域（420km<sup>2</sup>）の土地利用計画

エコ行政管理地区(Eco-Administrative Area)と定め、これ4つの区画に分けて土地利用規制を確定し、これを執行する文化芸術省 National Authority for Preah Vihear (NAPV) とプレアビヒア州政府の所掌組織の強化を行ってきた。ゾーン1は寺院遺跡地区(約11ha)、ゾーン2は考古学的・自然景観価値保全地区(約23,000ha)、ゾーン3は新しく造成されつつあるフンセン・エコ村(約4,500ha)と保全地区へのアクセス区画(約2,000ha)、そして、ゾーン4は持続可能なコミュニティ開発地区(約12,100ha)である(図4)。



政府は上記土地利用規制執行の第一歩として、2010年8月に遺跡近辺の住民約800家族を寺院の南へ直線距離11キロ（道路距離15キロ）造成されたフンセン・エコビレッジに移住させて森林景観保全の執行を開始した。その後、他の村や兵隊家族と地雷撤去傭員家族なども入植し、エコビレッジの村長によると2011年2月には1,703家族、住民数5,860人（内女性2,883人）、小学校生徒数546人、先生10名まで拡充された。



上記のように、ゾーン1（寺院遺跡地区）とゾーン2の広大な森林地区の健全で持続的な修復・保全・監理は、これらの周囲に位置するゾーン3のエコ村とゾーン4に居住する人々によって行われることになる。即ち、この二つのゾーンで生計を立てる住民に対しての文化・森林教育が不可欠で、教育なくしては世界でも稀有な文化遺産と共鳴するこの広大な森林生態系を末永く見守ることはできない。森を守る“防人としての心”は地元民自身の自覚に基づく“誇り”他ならない。究極的な“見張り人”は地元の人々である。このような認識、即ち、フォレスト・サポーターとしての心構えと実践を居住区であるエコ村の人々や地域の未来を担う学童たちに身につけてもらうことが、何より大切である。エコ村は入植以来、現在も電気や水道が未整備であるが、人々は日々を暮らしている。（図6から図12）



図 6 小学校（児童 300 名、先生 6 名）2 校



図 7 クリニック(保健所)



図 8 移住農家



図 9 貯水池のゲート



図 10 村内の道路

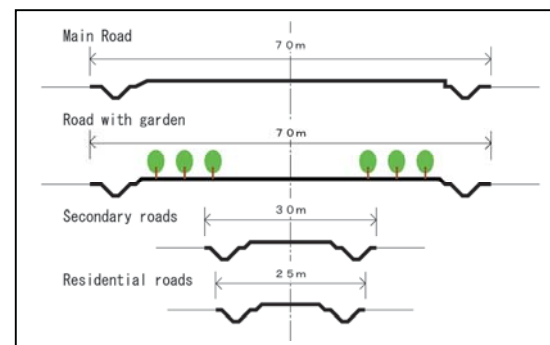


図 11 道路の種類と設計横断面

### 3. 寺院周辺国境を巡るタイ・カンボジアの武力衝突

この寺院の世界文化遺産登録にあたり、寺院周辺の一部未確定国境線をめぐってタイとの間での武力衝突が2009年4月から始まり、2011年2月4日からは、これまで最大規模の交戦が2月8日まで続き、村人を含む死傷者が多数出て、両国とも数千人が避難をした。しかし2月20日ごろから一部の住民は帰還を始め、28日には小学校の授業が再開された。

2月7日の国連安全保障委員会の両国に対する忠告と勧告に基づき、2月23日にはアセアン外相会議が開催され、アセアンからの国境監視団が国境の両国側に非武装配置されることで両国は合意した。一方、遺跡がタイからの砲弾により損傷されたことを重視したユネスコは元事務局長の松浦氏を特使として両国に派遣し2月25日・26日に両国首脳と会談した。これまで、この国境紛争を二国間問題であると主張して、頑なに第三者の仲介を拒否してきたタイ政府が初めて第三者の仲介に合意したことにより、紛争解決の兆しは大きく前進し、2012年7月には両国とも撤兵を行い、2013年11月には、カンボジアの提訴を受けた国際司法裁判所が寺院周辺の土地もカンボジアに帰属すると判断し、懸案の領有権問題によりやく決着がつく事となり、地域安定化が実現された。

このような二国間紛争を理由に、2014年までは、ユネスコとILOを除いて国際援助機関は世界遺産地域の保全開発への支援を控えた事により、この世界遺産地域は徐々に乱開発が進み、その価値を喪失する危機に直面していると言えよう。2015年以降、民間団体や国際NGOのボランティア活動等による地域保全、適切な観光開発、周囲生態系保全、住民生活支援などのさまざまな分野への支援が着手されているが、いまだ十分ではない。

当協会と東大チームによる報告書では、この世界遺産地区の保全開発は過去のクメール文明と21世紀の持続可能な文明を繋ぐ機会と捉え、この地域での“持続可能なコミュニティ形成”を長期的ビジョンとすることを勧告し、カンボジアの次世代を担う若者に、過去の文明への誇りに加えて、未来への大きな自信と誇りを与える機会であると捉えている。すなわち、過去の文明の誇りを未来の誇りに繋げる営為と捉えている。

1970年代後半のポルポト政権下におけるジェノサイドによる最大の悲劇は知識階級の抹殺に加えて、密告と密殺による“コミュニティの核心である相互信頼の崩壊”であった。とりわけ、プレアビヒア世界遺産地域はポルポト政権の最後の砦になった地域で、平和構築のための和解と信頼醸成が不可欠である。エコ村における持続可能なコミュニティ形成のプロセスでの住民相互の信頼醸成こそが健全で自己啓発的なコミュニティの形成に不可欠で、これが基盤となって、地域の文化・環境資源保全の究極的な担い手となるものであると認識されている。持続可能なコミュニティの形成はコミュニティの能力強化と同義である。

このような基本的視座を踏まえて、当協会と東大チームの報告書は、先ず長期的ビジョンとしてこのエコ行政地域でのSustainable Community Developmentと規定し、これを実現するためのアプローチとして後発性の利益(advantages of late comers)の最大限の活用と、住民主体参加型開発を強調している。これらアプローチを踏まえて、報告書は3つの政策ガイドラインを掲げている。それらは①児童と住民への文化・環境教育、②ネット・ゼロ・

エミッション開発保全、③資源循環型開発・3Rsである。これら3つのガイドラインが全ての住民と開発プロセス関係者に理解留意実行されれば、関係者が各々の分野で効果極大化を図っても、長期的全体的には持続型コミュニティの形成に少しずつつながるとしている。

さらに報告書は、この遺跡の普遍的価値を精神性の高さとし、それは人の営みとしての建築遺跡と自然生態系の共生にあると認識し、「Healing tourismや Spiritual Tourismと Organic Foods Hospitality」を観光開発の手段として「ブランド化」することを推奨し、他の多くの世界遺産との差別化を図ることを勧告している。

観光開発の基本的な視座は、訪れた観光客が心の中で何をもち帰るかである。それは世界文化遺産に触れる感動であり、それを保全する人々の日常の営みへの共感でもあろう。もし、観光客が観光地において彼らの必要とするエネルギーは正味ゼロ・エミッションであると知らされ、摂取する食べ物のほとんどは地産地消の有機食品であるとすれば、彼らは共感を持って母国に伝えるはずである。持続可能なコミュニティ形成の先験事例としての発信効果はきわめて大きいであろう。これが軌道に乗れば、経済成長が加速するアジア地域、特にインドと中国に対して、インドシナ半島に位置するカンボジアから発信する21世紀型文明の先験的モデルとしての役割は極めて大きく効果的であると述べている。

学術的な価値としては遺跡の考古学的解明と修復保全に加えて、エコ行政地域における新しいコミュニティ形成のプロセス（外生的支援に伴う内生的発展プロセスの研究）、このエコ行政地域が目指す持続可能な開発プロセス（特にインフラ整備）の具体的活動と効果影響などの研究、持続可能な内発的観光開発の研究対象としても大いに興味深いと考えられる。

#### 4. 今日のエコビレッジ

2009年に開発を開始したエコビレッジ地域であったが、入植が一段落した2012年から2020年の間に世帯数は半数に減少し、特に地域の基幹産業に従事する農家世帯数は1,708世帯から590世帯と35%に減少し、地域の維持さえ危ぶまれる状況となっている。

表1 エコビレッジを含む周辺コミュニティの人口・世帯数推移

Village name	2020年			2016年			2012年		
	人口	総世帯数	農家世帯数	人口	総世帯数	農家世帯数	人口	総世帯数	農家世帯数
エコビレッジ地区	4,149	1,183	590	4,801	1,890	1,285	7,172	2,512	1,708
スラエム地区	2,559	675	331	2,925	751	420	2,495	727	407
センチェイ地区	1,434	375	188	962	313	31	1,003	875	87
ボスポブ地区	624	152	73	461	123	10	589	139	11
シャンボークセンチェイ地区	2,132	470	228	1,101	290	145	959	217	109
バンコルブランビー地区	1,074	257	121	1,015	280	73	777	230	60
スタンキエフ地区	972	220	165	660	180	142	1,600	410	323
合計	12,944	3,332	1,696	11,925	3,827	2,106	14,595	5,110	2,704

地域定住が不安定化した課題は貧困にあり、農民が安定した収入を得られず、社会的・経済的な自立が困難となり近隣への出稼ぎで家族を支えなければならなかった事にある。



現地は元原生林の開拓地で、土壌は粘土質の不毛地で、各農家とも、そのままでは豊かな収穫が難しく、土壌調整や作付け品種の選択を含む農業技術の習得が必須であった。

協会は2018年1月～2月に「NGO等向け事業マネジメント研修調査」(JICA支援)を実施し、地域の開発管理を担う州政府やNAPVの計画、入植後長年にわたり地域の安定化(住民流出抑止)・農業定着・収穫増大等にリーダーとして開発を担ってきた代表11農家へのヒアリング、さらに州政府農業局ヒアリングを実施し、水資源の確保と肥沃な土壌環境確保の実現、そのための森林環境の改善、森林環境改善のためのコミュニティ連携の重要性が挙げられ、これらの解決が地域活性化、安定化、そして個々の住民の貧困脱出の要点である事が示された。

水資源確保に向けては、日本政府外務省により「日本NGO連携無償資金協力事業」が2020年度に投入され、試験的に大規模溜池が建設され(図12, 13)、乾季農業の実施(図14)が可能となってきた。さらに現地では、地元農民有志の要望により、NGOと農村コミュニティとの連携による森林環境改善の実現が求められており、地域の公共用地に「美しい森」建設計画が立案され、森林公園、果樹公園、お花畑公園の実現に向けた活動が開始されている(図15)。



図 12 溜池建設プロジェクト



図 13 完成溜池



図 14 農業生産の改善



図 15 公園計画

以上